

ビルマ

政治の空白地帯

タマニヤー山に集う人々

軍政権と民主化勢力の対立が続くビルマ。さらに、隣接するタイ国境地帯ではカレン人による反軍政への武装闘争も続く。英国から独立して半世紀を経た現在でさえ、一般市民に平和が訪れる気配は感じられない。

軍政権による強制労働、強制移住という権力の濫用は続き、国内で政治を語ることは、即刻刑務所行きという厳しさもある。

しかし、一般の外国人が観光で同国に入ったとしても、ビルマ国内の政治的な厳しさは見てこない。それほど、同軍政権の締め付けは厳しい。

そんなビルマで、政治的な対立や内戦とも無縁の空白地帯がある。カレン州に立つタマニヤー山一帯である。

タマニヤー山に住む通称・タマニヤーサヤドウ(大僧正)のもとには毎日、ビルマ全土から数千人の僧侶や参拝の巡礼者が毎日訪れる。サヤドウの姿を拝んだり説教を聞いたたりするためだ。彼に、或いは仏像に熱心に手を合わせて祈る人々の姿には緊張

感さえ漂う。

タマニヤー山に参拝に来る人全員に食事(菜食)が無料で供される。公務員の月給が千チャット(日本円で約四二〇円)の同国に於いて、その食事の経費は一日で五〇万チャットにも達すると聞いた。それだけの金額をすべて献金でまかなっている。

また、平和を愛す菜食主義者の大僧正を慕って、タマニヤー山とその麓の村には、内戦と内戦を逃れた数万人の人々が平和に暮らしている。喰うのに困っても、タマニヤー山に行けば生活できるそうだ。内戦で身も心も傷ついた元兵士も仏門に入って、新たな人生を踏み出している姿も目についた。

写真キャプション

・ 仏教徒が八割を占める同国に於いて、タマニヤーサヤドウ僧侶は多大な影響力を持つ。さすがのビルマ軍政府も彼には手が出せないという。

・ 六年間の軟禁状態から解放されたノーベル平和賞受賞者・アウンサンソーチー氏は一九九六年七月、首都を出るのを軍部に許可されたのは、唯一、タマニヤー僧正を訪問する時だけであった(撮影者不明)

・ 僧侶だけでなく、参拝にくる人々全員に食事(菜食)が無料で提供される。

・ タマニヤー山とその麓の村には、多くの村人や難民が住む。